

今回は、「個人の身上・事情」の伺いの「おさしづ」における「道」の用例について取り上げる。個人による伺いの「おさしづ」は、それぞれ多様な個人の身上や事情について指図されたものであるため、一見すると、そこに共通の特徴を見いだすことは困難である。しかし、松田武輝は、「身上伺のおさしづは、単に一個人の身上さとしにとどまらず、その当時の教内事情についてのさとしを含んでいる場合が多数ある」と述べ、とりわけ、「本席の側近者、本部在籍者、及びその夫人・子女の身上伺のおさしづには、この点が著しく現われている」としている(松田武輝「身上伺のおさしづ研究の問題点」『天理教学研究』第17号、56頁)。前回の「おさしづ」および「人名」件数の整理で示したように、「個人の身上・事情」の伺いに出てくる名前の多くは、そうした「本部在籍者」やその家族のものであり、この指摘によれば、「教内事情」についての論しを含む場合が多数あることになる。

実際に、「個人の身上・事情」の「おさしづ」をまとめて読むと、特徴的な傾向を見てとることができる時期もある。それは、明治21年の教会本部の設置認可後である。ここでは、その点を中心に、「道」の用例を確認することにした。

#### 教会本部の設置認可前後

明治21年3月8日(陰暦正月26日)の教祖1年祭が、警官の取り締まりによって十分につとめることができなかつた。そのことをきっかけに、教会本部の設置認可を求める機運が高まり、同年の4月10日に東京府において認可が下りるのであるが、その前後の身上伺いの「おさしづ」には、次のようなものがある。

明治21年3月2日(陰暦正月20日)

清水與之助身上願

心案じばかりではならん。日々の道十分迫り来れば、道も開くやろう。月も更わり来る、日も更わり来る、道も更わり来る。だん〜洗い切る〜。

明治21年4月16日

梅谷四郎兵衛齒の痛みに付願

道のため、世界のために事情尋ねる。今の道は一寸付けたる処、細い〜道や。これは世界の道や。世界ではえらいと言う。神の道は、今までに聞いても居る、聞かしてもある。

明治21年4月22日(陰暦3月12日)

清水與之助下腹痛み、大便へ行くようで行かぬに付、東京より願

運ぶ中一つの事情、難しい処、神の道通る処、人間は世界の道を通ぶ。判然と定まりて定まるまい。

明治21年5月21日午後4時

増野正兵衛身上播州より帰りの願

さあ〜神一条の道は、表と裏とある。裏の道は誠の道、一つさあ〜毎日に運ぶ処は、誠というは通り難いものである。陰の道は難しい道、表の道は通りよい。世界の道は通り、通り難い神の道は内、表と裏との道である。内に運ぶ人が少のうてならん。

明治21年6月15日

清水與之助下腹痛み、二度づゝ大便に行き、絞り腹のよう  
に付願

世上の道はある。神一条の一つの道通らねばならん。十分の道がある。何か締め方、神一条の道という。……刻限話、前々より出け難い。一人々々へ聞かす。

最初に挙げたものは、教祖1年祭の6日前の「おさしづ」であるが、そこで「月も更わり来る、日も更わり来る、道も更わり来る」と、大きな変化が来ることを予め示されている。そして、教会本部の設置認可ということになるのであるが、その後、梅谷、清水、増野の各氏に対して、「世界の道」あるいは「世上の道」と「神の道」「神一条の道」という言葉の対比による類似した論しがなされている。「世界の道」は、教会本部が設置認可されたことを受けているように思われるが、それについては、「一寸付けたる処」、「判然と定まりて定まるまい」などと言って、通りやすいようであり、それでは定まらない道であると言われる一方、「神の道」「神一条の道」は、「通り難いもの」ではあるが「通らねばならん」と論される。

また、上に挙げた明治21年6月15日の「おさしづ」には、「刻限話、前々より出け難い。一人々々へ聞かす」とあるが、ここに挙げた身上伺いに対する論しは、単に個人的な問題にとどまらず、「刻限話」の内容を各々がしつかり胸に治めるよう、身上を台として一人ひとりに説かれているということを示唆しているようである。

こうした「世界の道」と「神の道」「神一条の道」を対比した論しは、教会本部の設置認可の後から明治21年7月頃にかけて顕著であるが、その後も散見される。また、それと同様のものとしては、明治22年11月に何度か出てくる「往還道」(世界の道)と「細い道」(神の道)を対比する論しなどがある。

以上が、「個人の身上・事情」の「おさしづ」において、特に「教内事情」との関連で特徴的な点である。その中で「刻限話、前々より出け難い。一人々々へ聞かす」という「おさしづ」が示唆するように、ここで確認してきた教会本部の設置認可以降、「世界の道」と「神の道」「神一条の道」の対比が目立つようになることは、これまで「刻限」「本席」「本部事情」の「おさしづ」に関して、その特徴を整理してきたことと、かなり重なるところがあると言える。

ただし、ここにまとめた特徴は、まとめやすい点を記したに過ぎない。実際には、共通の時代的な脈絡を見いだすことが困難な「おさしづ」のほうが多く、「道」という言葉も多様に用いられている。そうした多様な「道」の用例についてまとめるのは困難であるが、しかし、それらは多くの場合、なんらかの論すべき「道」、通るべき「道」を指し示している。たとえば、「天然自然の道」「楽しみな道」「一つの道」「綺麗な道」などと表現されているが、総じてそれらは、これまで「世界の道」と対比されるところの「神の道」「神一条の道」を指し示す表現であるということができよう。